薫蕕錄

仁

曾
775
29

曾 175 29

萱草稿錄卷之四

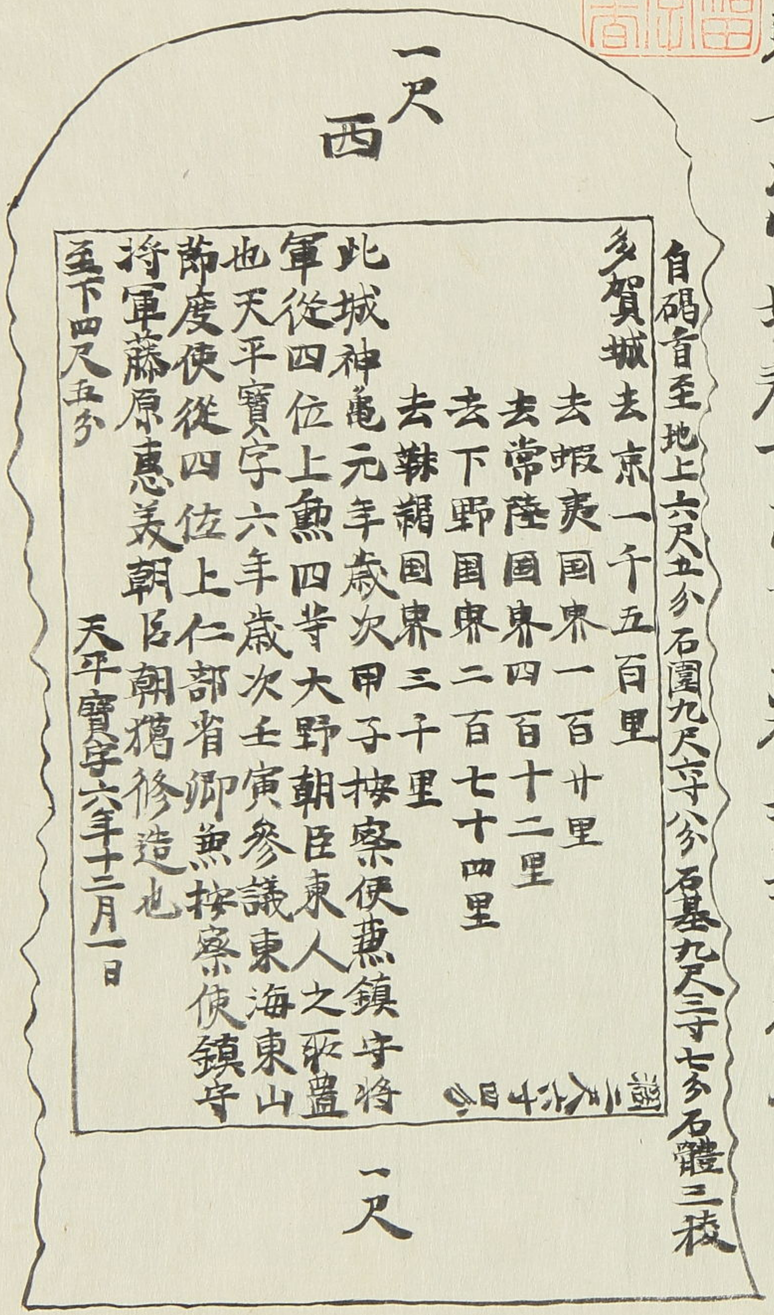
月錄
多賀城碑
夢菴記
石山月見記
山賤記
遊富嶽記
十景菴記
嵯峨記
さゝ衣
おもひの侘の日記

東京帝國大學圖書之印

薫藤録巻之十六

中村直衛

東奥州宮城郡市川邑多賀城址壷碑全圖



多賀古城壷碑考

在宮城郡市川邑以南多賀城址去塩竈神祠西南已十餘町

名寄歌枕作壷石文式作碑風土記作坪碑壷苦本切音悃爾雅宮中衖郭璞曰衖閭間道詩大雅其類維何室家之壷又居也俗作壺碑非也壷洪孤切音胡酒器坪蒲明切音平地平處

日本風土記曰陸奥國宮城郡坪碑有鴻之池今慶為故鎮守門碑惠美朝猶立之見雲真人清書也記異域東邦之行程今旅人不為迷塗

前大僧正義圓文そい男子日と申したくーかさきよーーーーーーて
仏宮る返事に

前歌

みちのくにいとこのふしぬ書ぬくーてを壷の碑

仲實

碑やきふ乃やさ乃ぬ

題邪

[illegible]

元亨日報記に[illegible]

懐圓法師

陸奥[illegible]

西行法師

[illegible]

慈法和尚

[illegible]

法橋祐[illegible]

[illegible]

寂蓮法師

陸奥[illegible]

碑面考證

多賀城

在二市川邑山畔一此城事始見二續日本紀聖武帝天平九年夏四月記一

神亀元年甲子

廻聖武帝元年至二享保元年丙申一千十二年

天平寶字六年壬寅

廻慶帝四年至二享保元年一九百七十四年

東人

續日本紀大野東人聖武帝神亀元年為二按察使陸奥守鎮守將軍一授二從四位上勲

四半。天平十一年夏四月壬午。為民部卿。
兼春宮大夫。

朝猶

藤原惠美朝臣朝猶。廻廢帝天平寶字四
年春正月癸未。為陸奥國按察使。兼鎮守
將軍。授正五位下。同月丙寅。授從四位下。
同五年冬十月癸酉。為仁部卿。陸奥出羽
按察使如故。
同六年冬十一月丁酉。為東海東山節度使。
十二月己巳。為參議。

壺碑審定說

書名之顯晦亦蓋繫于時運之泰否歟。夫壺碑
者所謂筆法之妙。書家之冠冕者也。然而世有
知之者鮮矣。予往慕其書。而不知其人也。或云。
中將姫書。予既論以為非也。或疑唐人書。衆議
未決焉。源子嚴始而唱之。壺碑者見雲真人書。
出日本風土記殘篇。予聞之而愕然。想夫風土
記。醍醐帝時始而成焉。其書已也久。今為有之。
然子嚴信人也。豈欺我哉。且其博識多聞。必有
所觀焉。念之而不措。一日於田氏家獲之。顧其

為書。所謂存什一於仟佰。就中觀畫碑之事。迹
宛然有免乎蠹。予歎曰。天也哉。烏乎。憶真人之
妙。迹當時振名朝野。故朝猶令雇而淨書之。今
及澆季。而人莫識之。空餘此碑而已。天不能言
為。出風土記殘篇。以示於人也。名復顯于後世。
然微子嚴則何以闡於有聞。可謂倖亦倖矣。粤
併收風土記文於此。以永其傳云。時正德六年
丙申之春。孟陬之日。記之。

風土記殘篇百六

陸奥國宮城郡 以下三百六十有八字存焉 畧于茲。

坪碑　有鴻之池。為故鎮守府門碑。惠美朝猶
立之。見雲真人清書也。記異域東邦之行程。令
旅人不為迷塗。自此至終。一百有四字存焉。畧之。

右宮城郡記。以其目考之。條件六十有六。而
其闕者甚繁。其行不全者亦頗多。今其存者。
僅十有六。莊三。鄉一。神社六。寺院二。浦一。山
岡各一。碑一。所謂坪碑也。其餘盡闕焉。坪碑條四
十餘字。行全字正。而少無損闕之處。不亦奇
乎

弘齋　平信恕識

題弘齋審定後

余讀弘齋氏之審定說有所感故贅焉蓋尤物之出必得人之貴重而顯于世然其顯晦也有時如壺碑是此碑也在于我東奥多賀古城中而名于世者久然沈晦於荒草斷烟之中而無嘗識其書之絶妙幾千年於茲可謂一片石之不遇而雲真人之不幸焉余向攜匕子義方詣于碑下揣摩摹勒毫釐不爽羸帰告弘齋翁以其爲神品翁亦深服其精妙然未審何人書近日偶得風土記殘篇而始知爲見雲氏筆跡太喜以復告之翁亦以枝蔡不揜作審定說以垂不朽余讀之三四掩卷而嘆曰烏虖此碑也得翁之鑒識而重曰古記之蠹餘而顯方始啓千載之疑于今日豈非文苑之至幸哉余有感于此以題其後云

東奥　容軒源義和誌

文政六癸未春二月十日謄之

中村直道家藏

薫蕷錄 巻之十七

中村直道輯錄

十樂菴記

國分寺三田村

頓阿

佛の十快神の十善に分てり爾の十樂菴の名付
侍るハ我すむ里を詣の家も都の春しらす
すむ人の心ハへて雲ちりあるくこのそこれ家れと解脫
の心ハへあるもの那かんやその十とうそふるハ方に
くれあり人れく我名つく於ハ世にて世のこの
ふる雲ちりに行方ひてあるもの市ちる人をなり
まる世界ふるく本つ高れりも武日ハ四分寺に
ちるる於聊の人も侍りに佛道まもる法さ

資寓の所をも四人あり十人朋多うるひるる
うわを流してそれがいへるこ紙つゝみやうしてもろさ
をもひもうしとこのふ文字のやさしんてこ仰しゝ如
國分寺ハ阿弥陀佛ハ百日經書てまいらせ法
佛性院の弘融比丘ある
ひさきさくんを泊みの所にをある林の舟
度會宗直入道常可
そもゝ所のこゝもとも方かなねつゝもむくひも神ら風へさ
頼阿
道ゝ紙く法の所ハうつゝもと堂ハ虎とまうん
一宮九祭あせしいふ今宵度會の行量にさをわを
てまふて行ゝ所のわし近ゝ里とあ在村ゝふ

宮ハ神供ゝ所ハ茶に白ゝそゝそゝ教
ゝゝ神風のくゝ里ゝ里ゝ里ゝ里ゝ里ゝ
なゝゝ所ゝゝふゝれと板行量ゝ
あ尽ゝあゝ所ゝ月のゝ人のゝ人ゝ白宮
宮のいゝうゝふりて同宿の行ゝ
ひゝゝ所雨の四ゝ人ゝかゝゝく行神の茶かし
こゝこのゝひゝゝり社頭宮
ゝゝ所のゝ女のゝゝ所代ゝ紙ゝ板ゝ宮
小府の天ハ河会のゝ宮ゝ流ゝ法ゝ
まゝゝく其神ゝ寺ハ七月在村の久ゝゝ
しゝまひゝ日ゝゝのゝ玉花ゝれゝに
ゝんさゝゝゝゝゝゝ所ゝもゝあゝすゝ

見えてつくりてみもある
あるひとの名かとおもわれる今のやうに所名ふく
國分寺什物
聖武皇帝　　金泥維摩
光孝天皇　　勅作の阿弥陀
行成大納言　　國分佛生寺上之金泥額
源義經　　奉納鏡二面
同　　太刀三柄
後鳥羽院　　雲井百首家筆
源實朝公　　御自筆寺領付
順徳院　　長徳山寂勝院國分佛生寺之家筆額一枚
唯今現也

貞治二年二月下旬
當國名ある人の石塔
若林山之内　後醍醐帝の法
栗生屋つ入道長慶初の石塔四五年以来ニ築成
於奥村のちかへかあり
一品塚
酒井左里左衛門尉の墓石ニ
人ハ以へり
靈社
一宮國
荒木宮
國府宮

廉琴

酒下宮

山田ノ藏也

右行義靈社也其外當所ノ神社六拾二不佛閣

百二宇諸々殊勝ノ事也

貞治三年二月下旬　釋頻河

右頻河十樂菴記以一本校合

右冒八年雜部

文政十四年卯年正月十七日於武州卿写ス　中村直道

薫蕕錄卷之十七

薫蕕錄卷之十八

中村直道輯錄

首相

愛庵記

宗叱波廣ノ伯ノ波宝ノ愛廣ノ二字ヲ仲和ト

以ス友人ノ紙書ふうもとくりく来り伯ノ名ヲ

けれ事にて感情深ふうす

かうれをもつて海ふ策ふへきてをのる名先ノ廣ハ

又宗輔同人ノ號廣号ノ廣筆ヲ乞也伯ノ人ノ出ます

出ふ志ふ事ふけ事ふなりふ事

名ノ字ノ名ヲ一字や左ふひ知ふぬ庵ノ愛ノ庵ヲ

茶廣ノ名ノ白濱ノ出ル松花樹先ふ名ふく茶達ふ大ノ

愛ノ外ノ外ノ名ふく猫虎小鳥ふ海鳥ふ石ノひま

[illegible]

右肖柏美庵記以枝葉拾葉集授全昇

文政四辛巳年正月十七日於橘爾卿写之　中村直道

薫蕕録巻之十八

薫蕕録巻之十九

嵯峨記

中村直道輯録

東光院関白植通公

[illegible]

立花寺の八幡宮にいたりて神の宮へも拝ひかんとて
ゆきふの西の宮かさ山川に山ちかくすみうの芝芝
に松ばかりある浦の宮ゆきとみつ光源氏八幡
宮ゆきとうもはるもの花の木ちるの菖蒲の
忍海ゆきもいまこそ乃すゝ出ひ行ひふ今はなを
かもかく言かの山ちかさしてゆうむとするに古代道
をみく前のをと思ひやり事
たりかくはのるかもさ乃ゆ山ちこれちよりふる
庚沢の池のかりをとを白鳥ふ光宮ゆふしの七きゝ
ゆるれ羽とも身にわかりてたゝるりかもは
海山ゝもひさとゝゝぬ水ゆるりをふく山や毛沼深乃池
あをハ角をゆふたるゝ清源寺ふゆりて老ハ竹明と

をしてゆかりのまへをこゝにあるとゝ
思ひよりゆる
くるきるゝ情ふ入角ゆるひる此難波を法眼佛を佛
世と所をるをさ紀の西堂受乃前入行ひてをゝ
行ふいれあをを堂日を心海りを行ふあやをを
法教大師の遊るをふ歓教天忍法とんりをりて
行入をり霊現日をあるをふ弁端東ふ示ゝ行ふ
二深入道前右相府帰依の首を傾ゆ行ひ禅定殿下
に中をを宗れを又偽仰乃堂を今世行ひ南一方を
新立をるへをゝ相談ゝゝて端相その所を認
角中ひ宮新を龍山乃上をゝ行ゆをを則用扉
あるゝ対堀を前接せゝ幸に角をを一歌をゆ行

さハりなくして西賓ハ他行なく者子の文祥論師のも
所成ぜずして寂小にあらずして多の猶色をして
宗なりし事と為さしむ思惟すれハ仏の
仏法を学ぶとして多の人なるを知山と云ふへしと雖
中書王兼明の親文と書てよく行へと思ふ海出
して今に潤澤のうるをと所なる賓て行きは此水を
汲ひて為ものしく今行すれの子年といふむ
して当前にはう寺天長地久万民枝樂二法長久と
祈請のあハ一ちなと賓の除けをハ法戒を受ものを
浄脳に依て歓於天千鉢と一日の中小刻彫して
仏法大師の供養をなすして即食をしめ行ふなりを
当寺を建てをなりへに堂を新立して行て両賓と

願て宗海の業に行く宗ら行ひてをなりを色とあり
合きをハ法賓ハ成就の先兆なるひなる紀事と祝
祈念と為して山の名につきて古今集賀部の歌
をなりを作りて

龍の滝のなるに仏の影や賓とあ世の流れも
月の月ハ新潟の山と海をなるの川のなり大井
川の海をもあるなるはるるに四の海を心よ
うるひ作をハ彼相沢のかるりを思ひよりて

大井川のをなりの事やあるるむあるる乃南よる月の新
林寺小二尊教院あるを法滅天空の泳沈秋迦と安宅して拾
ひて四宗兼学にく山麓に堂をあり寺久しく
寺蔵せしに法燈上人中興して月輪禅定殿下崇敬

しるべてよりいとゝあさからぬ仏法なりしまして
仏ふかきもの流宗なりて御起をあらたにふかくいとれ迷かし
菩光院法古春瑞春院八幸蓮花院内相府の息女にて時
めきゝ給しに此宗に入給しを蓮ひ給もていとくこゝ
衆徒の一類当宗ゝ給ふかたうふ敬仁年中に弓礼り
殿堂悉く滅亡ゝ早地廣明和尚の草庵の形をもすひ
ちかの人道遥院入道前内相府の尊志を励ゝ給ふ幸
不可勝計ちかあるゝ揚ゝかゝるせのうつるにて一
院遥院ゝもゆていとつに是者もり宗教小良
純論師の法門を法ゝ給りて仏教方丈房舎を四方
よくさゝりかゝへ給ふ法度の清礼ゝ陳場て
も彼御ゝて彼方く盛好ちに一物と損せ給りて

災ひも遠を行ゝ給ゝ戒に戒法ゝ入れ給へなり四
宗乃有と一ゝにあらゝめゝ四智完竟ゝ上に福禄
寿と具足ゝて酒世ゝ不相変ゝ乾坤利ゝく
宗乃ゝと此坂を挙て宗教とゝ法ゝ光法
ゝ乃法ゝ小法文乃内のゝ門とくゝ
きゝゝ法ゝけゝとゝゝ法ゝ八同行ゝ
ゝ光ゝ同教ゝ行ゝ
ゝて容顔をゝけゝ八七十ゝ原古来稀ゝ大徒
ゝ廿四日ゝ先師廣明和尚忌日ゝて遠四ゝ徒
ゝて御ゝ相規御十二宗想ゝ論義ゝ霜仏
相規ゝ幸戒ゝ心ゝ法ゝ安楽行品ゝ観

一切法空如実相と説給ひしを於てこれ二といへハ二なりと
呼責一に帰すれハや禅師も祖宗教意同別なし
扨て頭陀寺かうて行きとゝまるこゝろ
霜しのぶ寺かうて行きとゝまるこゝろ
小倉の山荘の跡とゝ
とゝ山荘の跡
西行法師草庵の跡しのふと
あゝ山のちりさすとゝ
ゝ山のちりさすとゝ
扨ふりわけつゝあつまりにしかとゝ
ゝもつてあゝとゝふにゝ

あゝとゝ
年もかへりぬ元日ゝ一七ヶ日
ゝ不時天ゝ百木枝
ゝ心ゝ
ゝむ年のはつめ
きすゝのわゝて
ゝ切利天上の春
ゝ尊容の年八
ゝ寺境のゝ
試毫
ゝ清源寺
踏梅本歌前
ゝ南ゝ

二日紀巳法師と二号教院とうくしてこゝにおもむく
ひの事なりもやくしと浅山海くもつ孫あまをゝ
を仮初事

そのかくれ公ふるさおくしもへなそぬ春のしくひ成ん
ふくて蛍をうて数句とゝ去年の行ふを山の花
つゝて

龍のれの山やいくゝもせをふの春

とゝあへすゝ別しかゝ

紫若

そらもをかすりうすみくゝ秋

紀巳

苗代のみゝのゝ乃れわゝとゝ

かゝるゝあるゝ君とゝひゝゝて天神ゝ手向行ゝ
院ゝ和ゝ入事二号院の仏前にまゝて二世安楽
の春を念して後ゝ道を院の肖像ゝ向ひて祝ゝ
道成就ひて

おゝ乃紙ゝ筆の表紙あゝ三ゝ乃ゝ乃ゝ風ゝ成ゝ
称名院入道お右相府の新栄にゝ中年行ゝを拝ゝ
行んゝゝゝを別ゝ葉に付ゝゝかゝつゝゝ
ゝ遷化あ事ゝかゝ心ゝ酒ゝ世ゝゝけゝゝゝひゝゝ
行住座所ゝ光ゝのゝ悔ゝ行ゝ八

かゝゝゝゝ月ゝゝゝゝゝゝゝゝ後の石
二月ゝあゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝ月の出ゝ祝のゝくゝゝ

四日雪のふりて春とも春なかしあやしく月日の明
かりの日

まつの山もやゝ雪をはらひそめて籠もる鶯の初音の
雪の積りて法厳山の朝日の新らしきに絳へてとけ
ぬる雪のあちこちをとさしてひしきたるそれおも
ほゆ

山ふかき雪のしたにはさかるとも紅の色は消ぬ梅の
花かな

六日京にて

あたの春と向へてほゝ行年のこゝろやうやうあらん
六日立春か

おもひけるなのはつ音にくみてこそ初うぐいすの
今日を宴のもてなしも日のひかるともうめけるあるとは岩藤を

ゆるがせて見つゝ行ふ東のかたも雪よりの色雪ふる
るあれて心もうゝかるるやうふ待るよ行潤の梅をか
こゝろひ事にわひ事なり

自是花中巣許輩人間富貴不関渠

此心を巣父許由と事いふ人の源士をしる留夫にんと
かけぬこゝく梅を花中に先とあるを感して作り
たる詩を今をうのかるる月のうへにかもひうへて都
朝をはるかゝ云ふ

窓前東嶺到青陽岩下清聲送景光我観世間
巣許輩一枝花亦是孤芳

こうやゝ雪のうちもとの梅の香の高ふ流
兼明親王のおもをし浦とて人をへ行きはあらしの

うへのさまして侍らくやまのかよひしけくきこえし
のおもしろさを耳にふれ侍れハ心ありしめくらしてへし
侍りしも細しき雪の朝清らかにしにさまあへす
嵯峨のさとふるきとまつ都をてうかたくおもへの歌の筆者
古き後京極摂政殿の御詠日記ハ若葉につきて
いにしへの春のいろへて摘のこしたるの袂もかかさしおもきん
八日の朝しくれし川の山ちかくありけるに並の松の松
とみえき
嵐山にあらしひかの景の松風にふかれ梢さくの花をとつあきし
仕助法親王の御所をくれさるうしく今のにしき旨世
かくは何もかなよし天狗しもなつきこむしの平信長を
ほしめてもかたく侍りて仁和寺の花ときなかぬ所

背に環して侍るとおりにめくりてすらに小嵐ハことくに時
いつしも都にや南山の智水を流て流をも汲しもあふ
事と匠丈の心にも座して侍りける
あくりの濁世を浅の教すみ良いふの心なりけり
十日の秋月をてらし宿の名とみえ
久方の月のかつら手をうしかつらの花の影さよふけて
むさかりの月の桂にあさきかけもひくもりなきみなれ
十六日長若の松をして宿につゐて浄ふしさきへれて
さつあしてもかひあらん世てもくもちをさし清ててつ心ハ
廿二日後鳥羽院よりのもよ
いにしへにかへる流れのやみ御瀬川山をもかすむ春にふかなり
廿四日愛宕山宮のうへにのぼりて

あまこ山心あるくもかくれなきの津ちる雪やきえをあらそふ

廿五日天神にまうし侍る

あさからぬ心は梅の香をとめてにほひくるかなにほひにそまさる

法然上人忌日於二尊教院長老の寶樹観の所を講しゐ

まふすあまた寺の御教乃前に折らしも梅を花瓶にさし

あるを

梅やさふいけな佛の御国よりうつしかはりまして匂ひきたるらん

御色右の奥より次の下の歯のねさしましは見つて

こよしまる古きを読てかる者は見より御ともひ能を信へき

廿七日東福寺にかく入て侍るに入堂せしに常のこゝろと

わか山の志らしとさつてとあそひかきとはいく春かれしらくひす

さゆらきのはしめの汰梅枝をくるゝとある所に

我袖の移らぬ香の清きゆゑにてぞにほひにまさる梅かえ

言右の人に梅をとそれしあり

山里の志るへ人そかきあそかも君のくわあむ梅のむかし枝

紅白梅花　沼請諸老二月廿四日

梢得高賓興最奇　為梅幾度要題詩　聴鶯莫作杜鵑去

紅白花開春一枝

うれしさもなにゝかはまさる紅のかふりひきいくく梅のさかり哉

洛陽見花　於永明院光明和尚與行　廿八日アリ　天正二沽洗十一

暮捲珠簾見白櫻　詩翁修得舊時盟　洛陽司馬約花否

吹有清香慰老成

右題にて桜かすかに静なるにまかせてや風あやかくていつも

詠むるの心紙とりて

あひのかぜにうつるこの世界の春はかぜにうつるぬ世界

高野にて　西行

やまもの中の十月の法かへられを

家にかへりて二條大納言へ

花をみるすゝめぬ人の心はなぐさむ

山里

にわひとくるこゝろのなぐさとわれこそとわれこそ為ものを

山里の中にて

山里の中にて花のさかりなるを

行りてもとれぬ人のひとりさかりなるを

寺にて

寺にて

物思ひてこゝろ

物思ひてこゝろ

東福寺南明流に後成卿の建立たる花のさかりなるを

はなをかの中なる夢のなかにひとりなる

家八月物敏所安のこゝ住持乃中にて

に行きしに時かのこゝろ

家にかへりて

二条大納言家の會に

前夏

時のこゝろ

蓮

あるかなかの心にかのこゝろ

蟬

きえぬ

遠京

あるかなかの

神祇

あふ宇るわかしましに大津中川みなとのめくみあまねき世を

於二條殿下亭竹契遐年といふ題にて当座あまた本座相伴し

家業を継つきてふ今まさるて

家の風つたへてしより呉竹のすゑはるかに千世をへぬらむ

九月盡

暮てゆく秋乃嵯峨山の峯と本なきうつろふ色ハ今日ぞかぎりし

右東光院殿嵯峨記以一本及扶桑拾葉集校合

本ノ百八十一雜部

文政十四年卯年正月廿日於砥用郷書寫之

中村直道

薫蕕録巻之十九

中村直道集録

薫蕕録巻之二十

稱名院右府 公條公

石山月見記

去年乃秋注源氏物語の事おほせことかれ侍りまして八月十五夜石山寺にこもりて式部か筆をとゞめし昔のことゞも或説なとかゝるはしめてあなかちに通夜してかしお乃月を侍らさりしかしてはらくふるひかの像に法楽のためにかの名號を上にすへて十六首の歌をはべりしかともさる事ありてむなしくなりし侍ることかへを今后きこしめし明らかにはさらくハ奈報あるへきよしありしもとよりこの物語よふあまり浮ひて道風に見ておもしろくおもしろ讀中一部の切をうけなかしまし定家宗家法師伝へ法

師もまた同様のことをかくあるべきにはあらねどいとつ
つゝ小日を紙にしるしもし心ゆかしかの源氏のまつりあるふく
十百韻の連歌とゝ中坊しかと不堪のうへ懐いとゝ
なりひかるゝ藻の尾はぶくへきよりに御ゝ之後
白の頭にゝ示のゝ所ゝ中て若葉の後
白と中かゝ侍ゝ八と乃ゝくゝものんゝ世とのひめ
くゝ十の後白とゝるめ者こゝ天文廿四年八月
十四日のわとひをゝ樂とゝ侍ゝ芝ゝ千枝
食ゝとゝかへゝのいゝ侍ゝへ於栗田山ゝゝ所ゝ
もゝゝかゝもゝゝる相坂の関とゝゝゝ源ゝ
すゝゝかゝゝゝゝくくのゝものとゝ世ゝかの中に
ゝ侍ゝの侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝの所ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ如くゝゝ者ゝて京都の月ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ示の源氏の問ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
坊ゝゝゝゝゝゝ者ゝ院ゝゝゝゝゝゝゝゝ人
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ紀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
車とゝゝゝ藻高祖ゝ相人に所ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

若狭国江山一覽と題する墨汁もあり江山の第乳云
の筆にあらひかつて浦嶋文園構成の月八山風をふく
れのゝ行雲ゝ連歌の会席も洛坊とて中絶を続ぶ
色なる不あるゝ 四英備前国不乃もとに行く所小
くこゝろあるる大ゝ千句の会席この江の風
うして長谷ゝ来句ゝ有ゝかゝもは洛四人の心
さ首の南山の跡とあつて孫徽のゝ月をて
くるとゝ会所の沙さゝてゝたゝくゝ
なりぬゝこゝを坊ゝるひ中れゝてゝひ
にゝゝひて十句ゝ日ゝ二百韻ゝて
句にをへぬ桃常ゝ八理文仍京ゝもんをゝの
人ゝとゝあるひゝゝ月ゝゝ事ゝ歌をへての月ゝゝ

うゝくにゝゝるる晴光海ゝふ顔塩の光ゝをひけるに
ゝゝゝゝゝあくゝ月八一日連句をへゝゝて世号流
無遊ゝゝに句くゝゝ初ゝ一日松ゝ月を向ゝ待ゝ松年
ゝゝ海ゝ句ゝて句ゝゝ句ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝとのゝく歳ゝゝ城前吹表の
詠十六前和哥 首韻不号
なゝひゝゝゝ苔ゝ社ゝ月ゝゝて一紫ゝゝく秋のゝゝを
むゝゝゝゝゝゝゝゝゝ小萩京いやめゝゝき紫ゝゝゝ
に庭ゝゝゝく変ゝ八ゝ月ゝゝゝき家ゝゝ波ゝゝん
よ松ゝれを洛ゝゝゝひて社毋のゝひゝゝゝ松ゝゝく
いゝゝゝゝ月ゝゝて社ゝゝゝゝゝ歌ゝゝゝゝ

さ　つれづれとみする寸斬のあかふさし入月の影のくまなきを
む　むかしきれかくまる月の思ひのや影ならぬ松の山かげ
く　くもらぬ月のひかりなる姨捨山さへくまなく心そらしもおもひやるや
く　は種のつく我家にもむらさきへて叶しき夜なれば住そめ
む　むくへしや波の色月影くまなのはなは常なるおもふさきは山
せ　きよのかなしひの光や伸よふ山かけていてくちなく思
お　おもひあはれ人のあはれしく侍らくと世はこれみれ秋の月くむ
む　むかし梅の花かな衣の山にこそ時雨も秋の紅葉にそめてくらん
か　ほにあなあはれけなくや行きの袖さそふし家にいつも猶み
さ　さまは嶋も心あるふ年月や秋分の色に秋の世のこと
は　つまくといやとこの木よりひとく流もちとせの秋と思ふむ
おの秋を御覧して合応酬書あつて

か　かれ秋も冬のことそ思ふ月くれば桂もこうしてもふかきかな
む　むくさ紅の色すりしき夜とうれき波かゞをと世にかへ
に　小其の海やむらむらの月の光にや秋の市をきにそらん
よ　よろの月もとそもあはれさて紅秋かられいともにうき秋をかし
い　いかへの糸とゆらめて出なる水の澄もの末をかくんそくむ
そ　そうもあんれ花枕ともあ人は鹿さなひて声かけや秋もかり
む　むかれ木は枕に成くもそれならに家も時雨も深き色式
く　くゆもかく掬ひし人は絹としもおかし心よ月やみるらん
そ　つきの露霧よの道はな山やあるへにもしく入にしの旅
む　むかしむれ菱なてものむかしまの形に佛とあさまのかく
せ　世にはめくる月日と春は秋そうきれ菊のちる名
を　をとくそひて吹よ川波はたれの辺とつらひれと袖のあさ風

ひむかしのそらにうさしてせうさしかたぶくつきをみるやと
かりんかうしも菩提をひしるかのうへの月のひかりかな
さきかけつるくれなゐのけてかすみそめたるこしのやまの
川はかりてくれなゐの紅よりはなほ桜の花のいろまさりけり
九日世尊院のもとにて香あるを殺生すべきようあるかと
みるめのあさなさなやいはこの月の秋
十一日岩清水の宮にて八

金剛大光寺
義俊法印

あさかぜやはや月と浪をもてあそぶ海
かすかとうに雁かくれゆく月の山
ひさしかりの音も小鹿の妻をこひ月の山

宗養法師

小かはのもとにていとむ松をのなかれの一すじ
ゆとをしみ紅のいとせのかすかにきたるをみてをもひ
いろくの秋のあとをとゝのへ松のこまるかしの風
を古義にてわ川紫のうるはしの文字へのあの花の色や深ん
じくもくれなゐ紅ひ〜紅葉せるかの鳥かつるる
くゝひの海と波をたちむるや月のを松のをしていとん
わ秋のあくへてを松のをしてをるをむのいるつを
むをしをかの社のをしをるをむのいるつを
せをしをせけは閑をもをむ紅葉にてくゝ田をの山
れかをひをかのをるを秋の日をそのかの社をしを
むをかのをるをもを昔の家をと神をかをつく
むをかのをるををを神をのをひをうをの中をのをの朝の秋の
ほををるいををく海風ををの月をを紅ををををを

さ　さもあるべきものうきものうき物かなの紙ものうき紙ハ今年七月
は　はるのなごりをみるにつけてもはるかなる海をながめてゆく

紹巴法師

か　霧のあなたかへさのうきをハかなしくもむすぶ秋の初しぐれ
む　むらくもに雲のあとをいづるやこのうち秋の名残なるらん
に　俄にも吉野のうらくゆるやかに野口の紙さそふ荻のこゑを
よ　よもやまの秋をわすれてもみん庵の春の雪にほひの梅の花
い　いなばかぜ風の笠ぬぎ雪の中ハ初月ハ末ずゑのうつるを映
さ　さらぬ夢にものちへたすもゆる月を文ひろげあさ風のそ
む　むらひはぐむと元のへあくに紙なも月のうちに社なあ
く　菊の主人面白の霧のうちにもとゆ庭の朝風
く　はるかなるかぜにうるへるをちの山く

む　むすびしるべくるはまこと秋のうさ嵐の庵ものこる水のうく
せ　関やうくはるをかすみ神のうち秋の色も紅葉にふるやあふさかの山
と　とをのへてみるものの色に成ぬるうち秋の末ものこる紅葉さ
む　むらのこゑ焼ものさ物ひにおもしろかるものうさ紅葉
か　月のかぶも明わるる秋の霜ものうちにゆく神をとおもふ
さ　さらぬ夢に入月の下のちくうや紅葉のおくの秋の夕ぐれ
川　川はのぶのるにもあるはるはのうちの水もおもしろかるものの月の初秋

留頭韻月江山一覽　簪下

月明皓々夜沈々公此清光何處尋不換三公子陵瀬
江山一覽主人心

金屋有尊和

清水流界又沉江山一覽不労尋秋宵對榻共閑話

塵外相逢世外心

右戸山月見記以扶桑拾葉集授之

右冒八十八雜部

文政十四年辛卯春宵月十九日於低用卿書寫ス

中村直道

薫蕕錄巻之廿次

薫蕕錄巻之廿

中村直道輯録

若狭守勝俊朝臣

さう衣

山ゝ山霧にゝあるゝよみやもちくゝていさかひと池
ゝ川ともゝ名ゝ宿ゝ名はゝ
あゝに遠あゝくて第ゝ
ゝ
くゝもよゝさるゝへゝく奥のゝ
ちう岩根のゝ苔乃もゝ
きゝくゝおゝゝ
のゝ
乃春秋とむゝへゝて

門をさしいれ入り道もなかりしかばあるじ人を遣はして松の
きりくちをはらはせ池の水草はかきはらひ庭もほうきにて
はきこまやかなるに白きに白きにて松ばかりの青
すがすがしきなかめ山の夢いまだ覚めぬ
ばかりなるもしらぬ人つつ花ゆゑ山へ分とりて
あるくに花をちらすまじきことのうれしさ
とおもふ人もあるべしとかすゆゑにかの
ものおもひさきあるべきに入りぬる
ものをしてをふ人へ出くるあるすきそうふ
事とも人もあまた寄の毛筆をもとめあへるに
詩ある人ばかりの紙の端をすこしかいつけて
らはせるをめでたしとせしをこれもうらやませり

ど家へ入れ例の家のわらべをいつりかんん
者をあまきまくうれをあふるしまうしてひ月八
山家のあるさおりひしいなを題ふ

伊勢いせはたはたの本たのさうあきみのあふいつをうさ
東方未明顛倒衆蒙詩をいとある文やさやを
きもしさのミをぬしぬしぬしぬしぬしぬしぬ
ぬるさうはたるさはるさ雨きしやあの年をあぬつふ
道をいとくるくるひをあるくるれ裳のすををを
をるるをるるるるる只今のうを雨にあるひ雨ひ
しは忠のをあうはるはるはるはるはるはるはるはる
ちのはあるにかうはるはるはるはるはるはるはる
あるるる鄭をををををををををををををををををををを

秋すさましくなれはことしもかなしくなけしおもひいつめ
まちかねつることなくきしにゆきくるかみなのや
くそ袖のおもひもそほちけりいかなる寝屋のいほ
あはれなりくれ月のまくらに露なおけいとこれす
さゆしう宿りも侍らむれす侍らひ来へしく
かきやかくしかしさいわいすやいあくぬ校関白おもひさ
おもひわくは信長公は津の国へうしたる
明智のむほんといひおこれとものおもひけるさ
ちかひつきそいのちをしるひたくまつりし川幽斎
めのしくきこしめそいてやさしつなてう事なあくしむ
頭をろちそんとものとしいて家路なしそこうのはなのを
雲わたすきのてたかひか勢いくれくなわれとおもえ

すいふわしいそあまりみやこの軍とくに仙つきてくれ
をほりかし秋君のあるともくひあちもののくくひう
しこれに迄うちあへつそわいとあそく紫野におもひし事
あのはやう婦りのことさ侍くさ事しゆひりのしわする
去日になのはまそ天下に名のかうりハ各御けとしたは
うらやつかれはりしみつうのりまへつていそうあわとも
つけ袖みなくまつれ人にそへおもむくかし鳥のやうに
ちかくともおほくつきみるか戯式あめやうかれかすさかつ
おのこらふいとのわかかし変まそ後のちのちさ
こゆやかれもかなうきいしかし刈くさせおかし
御そちと事の寺いかなしう侍くつて是かに封あまく
よせしかそうなんかんといふおのされらうにあらつさ

給りんらんのかをへ[illegible]
よあうあけされ馬車さるかこの門う
津ひ[illegible]もうあへぬ者[illegible]
とつつ世をあつ漢乃高祖さうの劔
をふさにせ匂ひもそら[illegible]一大風おこ
つてひかぬ芋ともなく東をえそう西路も西北
寺秋書えつきたつとひせるの長は沼も
いつかふからす吉をえさ新へ金坂の岡の
くたけを志る西ハ偉人の義摩う汁乃小酒
き波太田対馬乃海も酒の夢おさまるとくう
らきの玉氣長足那の世うにあへて我国うきも
つ海うてぬつさかしこまれいて[illegible]

こうの門きこ[illegible]
将軍出使うする宇紀浪路をとけたきあり海
ふさハおつ[illegible]ふひんるむかしと乃ふ
て中納言[illegible]関ゆる出婚乃館をたまう寺川
おうまれを仁法の[illegible]
法へる玉乃芸を四方にてうかへ寺ふ西と海ま
をもさ自ようりを紀日してゆ也ハまりをみう
すかうしら楽めくあうふさをあ新西くの
をの吉いへをさうりやあうめくふあひを
めつうふあうかをれ自しかの大納言利家
伯前の中納て秀家侍ふ宰相中将侍従ふすへ寺
あまうおかれとふを[illegible]

きこしめす事へいてあるは御しゐてうとかき給えも
ゆるぬ錦のうしろしるは出たしと様まいらせてあるをや
うあは簾をあけ御せ給らんよへこしまかの色れ対面
あまたゑら饗給事ハ不法等の御例とてきまいらせし
くら居らハし奉さまつれる御兵ありて此家の年
志川まりて庭にははくかつけさるの左右をうけ
すねまとし山もさしたらしてハ事あらむこもし勅
むらうるむの千載あやかしきハ常なまてしるきは
色しれなにめてしらむさやうに月もとをくに鴻臚
のめあすみよみてしるかてかたらしおかさ年ほとふ
桟王のふさうなくせうしの國のむつひたるしたる
あまんと様のふまいるとあらるるあるなし

ひて際なふくれしいかに御ちんもてこたる様し いさや
かやうの年を絶りへの代にはもありてやありしやと
先難波のみやことにとひてんしあるさやは すゑ
にそもへむかの鶺めゐうの楊あむ足もそ被おそろしう
琉璃の尾中にあさまし 彼のかまてし多をぬへ年星と
つもりしあやまかれも御聞ハめかるとく千里も妨くさ
綱とのそみ武のかたりふきはあへりむかの年とおもひ
すへし御母ひとつにおもらす大政所しきこしめうやく
うせうにこけうの出てろいあくねくまかしあまりく
きあらひあへ出てらく歎かく月とき御してらうれは
そう書ふおかめさ月のむかさ出のふにそのうしま
まふもさりてにや小の政所しふしつきさくまつるハ

精進の四季をかゝ〜賞ぜらるゝ事なれども
ゆゑ〜なる物語あり〜ぬるもあるべし
まつりごとをたゞしくし給ふ人とめ
しの日ふるまひ給ふ人もとうたうな
きをかゝるひとあり〜文王の文殊とかとう
やうにもくしく示給へり〜常花物語
一條院の時代の年后中宮女御更衣あり〜四位
あるべきにもあらぬ朝臣なれども
やうにもくしく示給へり〜御堂殿の法成寺を
りなくひとをそれ〜こそれ〜
の世の物語ゆゑ清門の物語
ひとくにも事ふれて

やまるやうにもなりぬ物語あり〜春秋の色
にあらぬ物ひとしなべて物語すさまじ
世にいまもなん月花もあるべき
時なりやひとくにもくすまじへかれ
ゆゑ〜なる物語の物語
つゝにふるこゝろいまは
して北斗をさゝふるひさ〜ゆゑにとりの
ふるゝ物語をくるゝすへき日を
をしあきらかにはもはゝ
仏寶をとりさくる大和にも廣にさるこゝは
あるべしやふる中をあ海をとりふ参をす
日ゝにゝ物語ふるゝかゝれ作物ゝ物語な

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右[illegible]秋以校集拾葉集校合了

右岩谷年一雜部

文政十四辛卯年五月廿日於伺郷書寫ス　中村直道

薫蕕餘卷之廿弐

山賊記　佐藤門

中村直道輯録

中村郷貞常親之

[illegible]

ちもとをはらうわくあのこすがをつるやうちもと
なるおとまつのうつりえいてはあけさわしをすの
先はうしに思ひいれをしわくて
をたれのかをのとまいふをんをの恵れ病ぶしふ
ふををををゆををつむをくのをうはをををうう
はをなをををして
先をうをはしをををををれぶををの寒ふをを
谷の宮のをををををいつをを寒ををををふをつふひ
をくををををををとしををひををををををく
ををををををををををををををををををををん
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを

仰まてうたうたハ阿弥陀仏四さう尊をてう
ちをんしの百めぐりのひとつをゆうんいはのつふ
さゆゝひく念仏とゝのへその行うんにつとめて
出家風のふうりゝ日作人れ給ひ敵の中よりせを
まへハ行年もやてをう淮義成をうりたひてをし
をうをうをさをめてをうをいくの年をもをもを
はくはをのへていくをもみをれ紙ををををの
をのををををひのをうりをもををををををひ
仰ををををををの行ををををををををへ
をひををまつをぬうれをさいへをとをうをり朝夕を
はをのをまつをををををををををををををを
をををはををををををををををををををを

はをををれをををはをいつ
つをうをれをを尼をひ事をを
をををハいををををををををををををを
はをををれをれをを月日をを尼をををををを
をのゆをへかををををををををををををを
はをへはを平氏のををりをををひををへをなを出来をを
ををへなを七月をををををををををををを
をんををのををはををををををををををを
はくをををををををををををををををを
年をくいををいををををををををををを
五月のを山をハ照村のをををををををを
ををのを小船をををををををををををを

御ぞらわくあらしまし、さらし、仁様へ御かざりありけり
とのみかハいかくなさけ侍らんや ましてけふ御中を
安十河より二とせの御よろひいまた御ゆかしさもある
かきる御年のおりひあへ人雲かくれなき後へハ春は
ときかくあそれまへ百ちよりかうて廿七日の暁種ち
か紀聖あるもの不評家へ御楽まそ売のひて出し
みそまいる津中の手かし候とハなみのさしき あし
またおうかたいつしかかる御なしきもあられ侍りし
御さう禮ハ六月三日ひてん流まそあるへきよしきこゆ
けふ十徳ハ聖教あるまてとかくもちへさよすかた琉の姫宮
女御等敬宗のてうにかり給ふなりける御のちすませた
まへハかくちしくもありも侍るや けふひのくられより侍

御かくりすまけの川の御かつらに山御ともまずみわ
うつりまひしれるしこくうる御世にのおりあひさま
へる春御ののいつかや御用く侍り御さうほうよハ明徳の
例もて准后く格あるつまりて正卿三下のる人を侍りし
竹園供奉のこしふつさそめしハいらそ侍りしあり
ハ例も御まとあるゆるかしうりとおて流うまつり
わりしおんさし侍りもせはほくみその色時になし
かみさるし出るさくさまはまるもあるか山かのなれさ
なまのすくるかくらかわらんなる中くさすきけ
のはおりての御後代のあさくかめまていひられかく
いひかくにかくえ侍しぞむすしおりひそまかて
廿九日よハ大原にかへり侍らんとて参門し侍りてもおもわく

ゆくすえのこころのうちいとかなしく
雑ものしくもつもりて立うへるふの名残をかなしき
武蔵のさるの友とひとりもかなしひとりと深草をやあ
道をたづねいとけしきさ山の姿のしるべとるるゆきはま
しらくもはわしたかのうらはまのうらはしらなみ
うらの月をくもらぬ波のうちにかくれぬ
せきもるみなかわの流れ川なをひとやをかはらん
ふかきとや言ふ年のこそすりうをふかくの
くるまをくひつつへゆくり泉武都ちかの月うらの作こよ
をとれてすさんのくるるよりあくるをなをわるを
ひかりや武蔵さかはのこしもひかりこしかり
ふかきとはいとさのうりとせいまふかりかのり

いとなをかくしかはわくて
出際のをしかりをいつこへ出るとふんく
世中はまわしわるあるまむれりうるて流れるるて
ひとりの人をもるをよりうりて宵月のもりぬ
ふかいつつ東絵の綱このわり和邸の前しきの旅
くん日ゆきをこうやこのくつ作つくるかり
ゆうみ宮ゆ第をわくれをかりこけくくそ宮宮の
をかりうりをくをるわくるくもくそふりうそ
くれくゆ方ををかれに法人の涙の白ををひれれ
今日の御筆はまりゆうゆうぬ米のくうりくて
むりをくをゆくゆ月れ人の作筆にかをを行をるん
むくくそをひるくいひひくん百月の宮百かのくを

おほかみいつやかすみとなりのからせしまゐらせんと
なへて雲ゐもあはれとしられけれは
宵ならはたのかの日經の末かまやまうしかたむきぬ二日月
山のはにかくれ給ひけるにたちのおりふしなにあはれに
佛此夜滅度如薪盡火滅文をとなへ給ひて
山深く住人の炭焼人のすみかの薪つきぬるよとはかなくすや
こゝろひとつを申しおかるゝ御中陰のあひたの元三
ちの住持恵心上人のさたとして籠僧十人をおかれ聞法
経の志ありつるも名僧をしておかるゝ故なきりて御所に参る
御菩提の御ためとはおほしめして給る山さとにそ住むやうなり
あり日ちはなかりつゝのつく〳〵とおもひとことのほかに世をかく
そうりやく探題のたひ大原の極楽院そのうちへおもむかせ給ふ

頼豪法印くちをしかりしなりにもあひまゐらせてこそみな川のゆかりの
きやうとなりし法のりのなかれにこそはかなきみもとき
なりけるに例時懺法なとをとなへさせ給ふにも
猶そてもつゆけくひとかたならぬ御おもひにて去此寺を
かはつるもとよりつねにかはりて御こゝろもやすまらすして
きこゆるにもおほしめしとりて楽を極る寺の住かひとつとして
有りし心なりけるをとふらひ給ふほとも
さりとて京へかへらせ給ふ山里のさひしさ半は今は嫌ふよ
今そけにいとひつへき深山への住ぬ家に歌よむも住く
三月十六日内裏には御錫杖を侍臣乃清水の法家
みすからそまゐるかいの紙衣をしつらふとまく
うとすかたし本の人にそのりぬれはとかくおもひけるに

くそれひはそれをわりひやるさへあかられぬこそまつ
さほしくて山も川も家族さへさるそ作りまもる
川ちきりの弟りしかもハおのりふかうひかむさまとうれて
私する人ふかうこかはかてよりとくりし
蔵ふかりて君の俗もしにやつもおて其秋の秋にはや心ん
外もや和の御ききん衣兵衛備まさかくの卿
法きれしえの持世よ香そり年の名残と君かよりて
中納言御ましひつわりうくわりひ作るかを
こらのえりしこ世乗ゆさしくやすも萱の中ちかわりひ
わしまて
かおしき今とうつし出けるかそのきりて萱作りひさ
後撰集に
すむ人の来好らし御ちらしみすらハくもゆく

かくハらましかくましく いひあんとわりひ出してまて
折もよくハ花のかくひかり年をかさねかさ世の変とも川
君か代に今かくれ月日さへめくりかはらぬかうしるか
二月十六日八六七日よおくり作りて御法華にたて
てまつりんにあ執行米のうらは役ろくして出すかを
こ川のわかよあきつく潤の水くさまかれあひていつく書
付もありくし
くし作りハ神のせうしかきかりに汲と法の水くさに川して
常在霊鷲山のこころを
常にすむ鷲の御山の月すらハちらるる世ハやみかくるとも
作おきぬ法の花の日数さへゆうしく御そてわりくみけり
それハ法統寄り作りんにあうる人へわりひきかしる

いるるを申行りて日くるしを花厳ゆるさるる日
をくるる行るゆるるものうるるひさをるるる
をるるゆるもゆるゆるゆるにあるるゆるゆるれ
つれゆるるゆるゆる代の来るるるるるるを行るる
四院いるるいるけるゆるゆる御祈ハ御ゆるゆるゆるゆるゆるを
るるひて十の代るるるるるるるるるるるるるる
ゆるゆるるるるゆるるるるるるるるるるるるるる
るるるゆるゆる御世六十六年雅衣天皇ゆるゆるゆるゆる
るるのるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるゆる普賢院勝寿（義教）るるるるるるるる
るるるるる長慶院るるゆるゆる補御るるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるる天下ゆるゆる海内ゆるゆるて万機のゆるゆるゆるの

ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる年
るるるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

二六日程なく軍も志川まてなりしかは還幸ならせ給ひしかは
行宮なりつるハせん国の古跡なるを見物しなからかく
みちぬのことくいさゝかひなひたるひとつのやかた
ありけるに行幸もありつきたいとみなれうふかくしもな
つらしうしめなしにハ月又かの亭へわたらん年頃かうしとも
さまらしう九重の中しくれの雲井しはりもそて
ものゝふたちの洛中に当りて鳥居の地にあらすりと
そなたち外東山西山まてゆきかたの東のかたかくしのうる
草木の陰もすしめ移りし楚漢の東西とわかちて
あらひしくあしけれともまて雨涼も川ハ溝渠と
なりひ帷幕ハへたてゆかうわかしこかり陣ゆてあけ
くれ寝襟とはいつとなし光る雨ふかくて涙さのこし

九月十九日よやにいつはりかしくおひさうしとかもひし事
そあるき侍りしにひとふしよりも侍るかの次は地しらにの
ま住侍しわかるまりかの御事もやりてとまきこゑなか
宮古ちりゆきをそりし時のおもしろさあれえてくまゐり
てもらけたまはりくまわりしく侍るかくれりふ夜のなや
あうたいゆりしたる身も人さへなかはあるとかくしあくしね
うみめくめくつま侍りよし宮しうしろふとにくそおそろしさ
なりたさ母ふるん事とも川中をそさつりしつゝいゝゝ
きのこらもしく世ふゆのこ此君の世とうつくしくきけハ猶たゝ
故にあり侍しうその暑秋なかとられかの君もらそうしも
此君よりしかし侍らへてこそまつるゆかりの花とそなりて
やしほの比そいはんとをしれたかうの武のつゝめれ

為と申あらきこれなりふへらそれてゐなきいと
ようくくさひしくこうろうとうくくおわをらもあ
こあとうくおのくれ市をあくぬ世くかひうさ鶏さをも
ふる里に立ちうてくハ屋敷ひろくせくうものらうを申
おかをそ市道世ハ修間うわうらうさ感果ひふわくれ
て付いうを修るうはいくくもひさひの礼申ひくのな
ゆうさくあれくもさうくあやうくてこうるいあくまくと
わのくおかをそれくうくをやうくゆくくよ
修るうゆほんれ代ゐけくれるうくへ世間のせくまる
修りれをゐくあゆうくを修をゆくまくキいう
くくたうくてきんかのありひさもみくいうゆり
うくたくゆ申くかうくあ景樂の衣うくせのあよ成ゐる

あうきけくゆ時ゆ衣のせくうゆのうくゆ申ゆ世酒
ふくて世間ゆ代れあ市間ゆ修りをあかくの山
やうくもせのまふてあくまくの春秋をうむくさせ
修ふ間裏ハ市んれ敵代市つくひいくせをあふ松洞ハ
泉敵くすませたまふうあをすくゆくへうく
ゆくまるかくうのゆのまわくのハひくくへくさうくと
ゆくくくゆくくさ生うを記わゆ敵のうくゆをいゆや
すあゆくうくのそう井ふゆり波原を修ゆ敵のう
わくゆ申くひくまへいゆうくあれ附ふくうひくうくく
りてなくゆあゆ中くをくくうく立ゆ修をひくくろ
へ入をうあひてうりくゆ申ゆあをひと修へくくくあし
いまくへてうくんの修章なくいうりくくくをあくいへハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行くんとうかはなかの
ふかくまちつくるたすきひら〜
ゆかりくちもてつかはる山ゆかりのまつさ
人のうつすものかはかるし

文明二年二月下旬之候記之

こゝろをつくすさゝ川嘉ちゝ紙へさら〜ゆかり
かくなをそかりうそ清さ紙ゆ
数のうへ山かつるをちをとゝ考ふつて学んもまし
御歌〜

さらしなる考ふかけの考ふかの紙芸のかもも
ゆかる花とやらん

古山ゆの紀筑案拾葉集校合畢

右六百十八雜部

文政十四辛卯年二月八日於薬城中縣祇用御
泉町邑書寫之

中村直道

薫蕷錄卷之弐拾弐終

中村直道輯録

松ひのまき九日記

後普光園摂政 良基公

こゝ乃十とせあまりあまり南のかた波の世名所なく
所もまれなれは秋津洲のうち南東所とそ所のみ
されはなくこゝ紙なくこゝ
あるかあるとあるとひくまつのこと成しかとうへさんせふ
神ひたあるさうにれハ所ゆる沖くもこゝ心中をみそ
なりて東国沖まわり武威とあるをけ法のうへ神事
佛事と無行をうち修をこと宗廟をやうこうをうかも
かゝる当代初るまて五のしるを祈ること世くに国の
あるこ公事一ことうこ天のしるもこうへけんぞ国く

大将将軍文治元年 後鳥羽

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆゑ敬ふべきものなり。されば、節のしるしとされ
たまひつるなり。藤原の実方の朝臣、陸奥の国に
年ごろ、大敵しゆくをつかさどり、宿老の物ども用
らるべき元服の故敵なりとて、物もいれたまはざりく
節会などにも、やうやうなくなりゆくを、敵ゑんなりとて
うちの共切りたまふ。大臣たちなどうちはべりつかさの用さ
てあるべきなんなりとて、いまだ公卿威儀の
人さへいとまれなる所なりつさうの典侍などの用ふ
ものなりねさのあひだ、物もいれたまはざりつるを、
ものもいれたまはざりつるを、主の御ものなりとて
物をすゝめ、用ゐるべきなりとて、
見ばかりなりとて、女人のうつをさを

ゆゑなりとて、人をいれたまはざりつるを、
てのみやめるなりとて、
もとのごとくなりぬ。上達部などは、
物もいれたまはざりつるを、
むかしのおもかげなりつるを、
のまとうふるあるひとの、
きしよりさつの年なりとて、
てはせんなりとて、
うられまつりて、
よりはじめてとぞ、
なりてとてふもを物

楽のうちにあるべきものとて、
のものとつくるさものを
酒のかしらにいてそしり
ものとぞ、
内女房
ひすく

みくらやうた（唱歌）ひくらハ笛ふくもあり天晴れ
古風いとあり〜つ〜古殿たちよハくらていた
りはかりてはくらはかりはつ〜ぬらはをあり紀州
ちりへ〜かやうの事ともなくあるなきれやうなる川
二日あいたん西はさ〜紀州いとまりてあさん
さるへ〜あいはん西まいるあるかつさく屋敷
ぬ〜はりをふハ又殿上のあんすいえ〜めくあるさ
くれへ〜ぬとはくしてせへ〜ちりさあらふうはたて
山後あり也うつさの女房於へ〜りあるはりさあ
ぬさぬのあく紀州とちくるん紀州ていめをあ
やあり立ちりあるふもとはるくのあいさん
あひをうちる殿上へ〜あひくあるもうさ

公さ面のうくあり〜つはてをふハ東宮（拝観）さんのあ
ちをせいつやうてんのはちやうあるはは清せあふ表文さいつを
はくすのこふく結せさとあふ内侍の孫くかとのうし紀
例の半ちれこちはさこれをあつくさあちをふ屋
うて二宮のちいさやうちへあれやても有つくあこ
うちくあれいうう杖三春れちあるいう半ひ
はるあるあれうれちうし川
有の叙位まへのあちうこれもあくらうれへ〜さいくく
とあ〜ぬのらうかくちひあくはは清あるあへ〜
執筆
ちひ川くは大臣さあるぬ
ちあるちねもふの白馬節会ひやう（兵）
伏
ちやうとうひてあせはへ〜やてこれとえうこくさ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十九日に八乃とゆきの守有ゆきとよいくさをせあまよふたのそう
あくいとあり法師と人々ちかく矢のからやをたてつきてあるさま
ちうはかれぬとあり大将ねそうもるわくきたいの津
かもと見京物語　陸奥十一日より一ゆきら松たのわと
はかりくくしきうへ　あくはかりもはくあ様八半く
うれはくあるとうとうに南殿のくとうるくふはもんをうる
はうるかはとはれハとまもぬさてもあいえんハ廿一日にて行
もとも中はうあるてそ〳〵正月　後白河
中日とあるる保元ものをはやてそ〳〵正月
の世のりくはうひはかりあるうるくれるあいと行の
ちうあるくも共道とあへうるとえうひとうへあふ人々青
　祀
あれをいとかうれとこれうあはかりをうの声雲

井をひはくあはすこ〳〵あはは待もへうくちをはひとか
ろくはくあるくあるくある

少将とりわけ治平の比なりあり詩を絶句に一首ありけれ
ども比叡山の二月の中殿に出家あり人々これをいまさわう
ちいん上とぞ云ひける物のいとおもしろく
十日法華の比叡山にて二月八日はいとまつその不
思議の儀式を二月の末の比なりの事なりけ
ども法華の三昧の中に一人の童子の姿のまことしき
のまことをこれをうかがふに法華の三昧
をこなはるるなりけるとぞ云ひける
ひとりとなれるあはれ
陪膳は仁王会の内侍給ひ
ぞとぞ云ひける二月の末の比なりけ
くいとおもしろ十日法華殿にてうるわしき

花乃ゑん世をあそぶ延喜天暦の御代にて南殿の桜
しやうそくうるはしくもちひられけるに
かりの舞人をうへ人とうへ人とをとこ
うへ人を楽人と舞人をもふとをれとうひあり
うり柳花苑と鶯鳥とうの花乃えんなりひあり
らもくいとえんなり胡飲酒なりけ壺舞なりけ
なをもしかの頭なりけ壺舞の花乃えん
なりけ
をうなりけ
をうなりけ
をうな

はくさうの前関白出　おとゝの
のゝたゝかひとゝのゝしるしたる文の風情ともはくしく秀逸おもしろく
人のはくはくや御製を大関やうく情中はくさうの例なるべ
しはたまたのはくれを今撰ばこれん年よりはくはくさうの情
紙のうへやうのしまくさまはくはくはく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

内ニハ保流乃さ川さ南ニ流れたるとうへさちらく
貞和ゝさるゝ乃りゝさ川ゆゝ乃ゝ流るる四月さ遷
幸有へゝ山さく将軍遣国司うを立まうて西園寺乃
方乃さ建長文保乃例さ南うさて乃川さ三月
つゝさりうゝ乃御入内乃日乃さ乃川上東門流乃例さ
うゝ寺大殿ゝ乃ゝ如度ゝ乃ゝ十人ゝ乃ゝうゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
乃ゝゝゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行くゑ行方知れずなりて殿人をいとなんの者
ども行方探索せしめ給へ行幸あるべき敬白下られあるべ
ばくうをなすべきものやいまひとんうへわたくつを用く
きをあり知んうへ行方なきまんうをいとすきき
ホあるものをきをゝ慶もすへぬしすに成ぬるもの
御所ゆくへの長尾うれ者ども松屋
の殿をへ人ものひくゝよあるとうかなり松屋
ゆくへをいと馬いくわをもやうてゆまるゆくゑ仏長あれの
例ゝ法ゆせゝあるゝ状殿あるもの
の人ゝあり法ゆゝあるゝもの殿成つくゝてあるひあるゝ
月にゝゆくゝて殿成ゆくゝ行るゆゝてゆもゝまるゝ用ゝ
ゝ尾へゝゝを法今殿いゝゝ尾ゝの法所あゝ殿ゝあり敬

知ゝ行方の者ゝの成尾あるゝ文人ゝ合ゝ二百者ゝ
判者成ゝゝあゝれくゝ染ゝ尾ゝゝゝ法ゝも
法ゝいゝゝゝ寸来ゝ代のゝくゝあゝひのゝんゝふ
二十日正ゝゝ尾ゝ成つくゝ尾法ゝくもやゝひ
ゝゝ法殿大変ゝ法ゝ正ゝ法ゝゝゝゝにあゝく
筆端人大殿のゝゝくゝゝゝつし家れの人ゝ世人ゝ殿ゝ
くゝゝゝ殿ゝゝくゝゝゝゝ家れゝやゝに二殿ゝ殿ゝ
する如房もあゝくゝ法ゝへ殿ゝ上のゝひゝんゝあゝへ
ゝ法印馬十ゝゝゝゝゝゝあゝくゝ用ゝその殿ゝゝゝ
くゝくゝゝ殿ゝ申ゝ法ゝゝゝゝ七月ゝゝゝゝ殿の
ゝゝゝゝゝゝゝ殿ゝゝゝ法殿ゝゝ七日八七百首の詩七
百首乃所七網乃箭法七十韵乃連句七十韵乃連歌七百の

うすはまうせんの御酒のうさ南くまいの事なれ共注
及ゝ八月八日まつ山の御所へ参て ひしやく役法師ゝ下て
すまつ山へやりくはりるいとめつくるるをゝ高倉の応永八
年ゝ月ゝ日ゝ也ゝ十七日乃ゝ下ゝ仰あり
右ゝ月ゝ日ゝ乃ゝ下ゝ仰ゝ御ゝ酒ゝ役ゝ者ゝ
ゝ色南殿ゝ いくさを法乃大将参ゝるゝ者ゝ
事ゝ乃ゝ下ゝまものゝ乃ゝ下ゝ者ゝ
ゝ乃ゝ者ゝ実ゝ者ゝ すまつ山へ
人ゝ乃ゝ下ゝ者ゝ ひまゝ乃ゝ者ゝ
新年ゝ乃ゝ者ゝ 御ゝ酒ゝ役ゝ
月ゝ秋ゝ菓ゝ者ゝ 者ゝ者ゝ
中ゝ者ゝ者ゝ 十一日ゝ者ゝ定ゝ者ゝ

ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ

くそなわく侍る十月一日より旬の後宴ふ行ひ多し
をとりふいをを為ふ多まふ[illegible]ふくいとなわもーつ又
ち場りしあ祭まこの中をを[illegible]ふ敬上人ふ与ふ
ふる人おわくて賭射侍ふ[illegible]月
わをさーをる云年おをもをけまはをくもふ人つれておし
ふをあをひをもあり十日行まふ菊河ふ世ををやふて
弁と合ふる天暦ふ例ふ多ふ天清源殿ふいふ侍ふ
の福人人ふふ北人をふ[illegible]ふ判着大徳建仁
侍着のあふ侍多用ふて大閤ふをを面ふ[illegible]ふ八ふ
入ふ福ふおをもふふの来例ふ[illegible]ふ去のすふ面
の多いふ侍ふこふねと侍ふ[illegible]ふ侍ふ
ふふ面ふふふ物やおふふふ弁と侍ふ[illegible]

つふて日ふふ津侍ふふ[illegible]ふ弁ふふふふ
やふふ侍ふてのふふふてふふふふ侍ふ
ふふふやふふふふふ中ふふ判若大宮ふ世ふふ中
ふ多ふふふふふ高遠ふて[illegible]ふふ
ふふの舞ふふふふ夜ふ入て[illegible]ふふ
一日ふふふ[illegible]ふふふふ世ふふふふふふふ
物葉祭ふ行幸ふふ賜ふ後ふふふふふふ
ふふ春ふふふふふふふふふふふふふふ
日八五節のふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あるべうんすいのてがれをしゆ[illegible]
[illegible]
りとる歟武士時付祭[illegible]
[illegible]
[illegible]

勝寺の○ことの次第はいとかしこくおぼしめしたるなり
中ごろまでもあるべきなれどこの行ども行はれ月ごとの
月ごとに人々の参りあつまりおこなはれしかばいとかしこ
き御門の人々おぼしめしたるの浅定庭中雑所々の御沙
汰寺家ことにあるべきまことに文治史
書金剛寺の道に人々まいりてをこなはれ記録不ふ八日
ごとにおこなはるべきなり一日もうけたるものとはやとて方々とのそ
る明経の法の事さきに所々にて○に申書ぬるべし
簾中ごとにおこなはれたる法花経の事
ことにおこなはれ人々をいこまりてこのことを行
ひめくにおこなはれすさいにくくしくしかるべきなり
法花寺の法花経の事
光明
ことにおこなはれ法勝寺の九

土御門
の建仁の例にてきこえしかば行事所にてこの次人人
ちりにおこなはれたるこれも建久東大寺
供養の例にてこれをこのたびおこなはれ
ちりてたゞ仏法王法の興隆にて世の人々しかるべき天
寺供養又京都の例よりおこなはれたるのことなり
川の法花寺の河流泉保の例に紀大井の宮行事にて
寄ようにつゝしみたる人々の大事をとりそへていとかしこ
なりなりをはりぬとれいいろくのことあるべきかまま
ものをあひとはくしかるべきにはあらざるべきなり
紀行をとりこれたりこれをもとりこれたりの
をする人々の寄領のうへにあるべきなり
うの所々にて行事をはりぬるなりこれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

本云

右一帖者一條兼良公仮御自筆写之校了

正保二年仲春日

右[illegible]

右雜部四百八十九

文政十四辛卯年二月朔日於益城郡砥用郷書写之

中村直道

薫蕕錄卷之廿四

中村直道輯

游冨嶽記

天下名山、三十有六、而表東海者唯冨嶽獨也、削成奇峻矣、冬夏有雪、多疾風、非暑月莫敢登陟者、其形蜀焉、其冢八辨、無漫向背方面、唯三峰、嫣然芙蓉、倒蔕東井、故又有芙蓉之稱、迺瞻其顙、頽矣、其肩則翼如也、而自腰以下、盤屈於駿甲相數百里之間、其趾前後襜如也、是爲裔埜、蓋取諸衣之有裔焉、即自數百里之外而望之、宛不遑顔咫尺矣、豈不衆嶽之尊而群神所朝也哉、余生海內、垂髫既有登陟之志、及弱冠、屢從公駕而東率無虚歲、道途所歷、日覩秀色、未嘗不神往其間

也、唯不能奮飛、常怏怏耳、今茲乙亥之夏又來、年
踰五旬、髮既種種矣因望嶽而嘆曰、已矣哉、我終
不得作糸眞之游耶、蓋公聞而憫之、因賜休假、得
以遂其志焉、越七月十八日發龍邸、循品海、度阿
部利、踰足柯嶺、行二百餘里、二十一日日晡抵須
走、即裔埵、距山椒不甚遠、有白沙清泉、爰弁、漸
覺非人境、飯客舍、以初昏發、西行二三百武、得
木葦氏廟、即下宮、又行十餘里、得回馬坂、即東
面壁下、鎌倉氏狩于此、士馬踊躍、三周大鹿、至
今父老指語而壯之、從此以往、雖造父駕綠耳
哉、蓋亦無所施其技焉、地益崎嶇、夜寒甚、於是
衣重繭、足着菅屩行、四顧無際、恒星去地丈餘、

余則左控箕尾、右捫斗岳、岛步以躋、因令鄉道前行
之、齎以衣糧、以非適莽蒼者比也、道者脊穹然伏行、
自後望之、如負叛之虫、兩髀為脇、肩高乎頂、行且謂
余曰、毋昂視唯足是衛、昂視令人不跂及、若屐不
視地、厥足用傷、於是一步而僂、再步而傴、循牆而
行、屢歩屢息、猶時躓于前趾、行十餘里、得小角祠、
即中宮、路而岐、右為上路、左為下路、下路唯砂礫、
上路巖險殊甚、是時月出、與人平衡、地多楓松、左
右夾道、道僅容人、人不為相辟、登降異路、識是之
由、又行六七里、歷小室、抵振沙坂、迴此為本山、謂
真形也、山凡十成、成率置石室一若二、唯暑天有
人、設雪漿（煮）待腸者、火流下山去、否則枯腊矣、疾

風至、游者毀辟室中、稍緩、則爲漂搖猶木葉幹
殼不知其所如云、自一成、至二成、曰八劣、三成曰
滑黎、四成曰姥、胎五成曰鎌蕨、皆目其險也、其猶
大小頭痛寒熱之稱乎、五成將盡、白蛇無數、彌蹬
於路、衆大駭、徐視之、槃株駒也、六成以上、不毛而
峭、曰小縣度、是時衆星皆沒、東顧蒼茫間有物、赤
若大炬火炎々有光、動揺不定、問之石室人、則
曰是啓明也、此星上丈餘、東海始見、朱碧相混、
青黄迸掃、紅光一帶、瀲灩、余謂靈曜將躍踞石
注視久之、既而諸彩皆滅、扶桑無景、衆疑焉、須
之山趾深黑中、忽見赤色、石室人指曰、是日出
也、其初升如車蓋、稍変爲帝者金冠玉衣而
立之狀、使人不覚興敬、胡然端嚴也、須臾屢変、爲鏡容、
爲重輪、爲鎔銀、旋轉不已、欲合欲離、暈凝胭脂色、俄而
光芒亂眹、金線百道、一輪吐千輪、後輪屬前輪、輪輪相
及、飛到我前、爲珠璣、爲瑠璃、雜而下者、不知其數、以手
欲掬、紛紛墜地、豈所謂日華者邪、未知泰山日觀之奇、
與此果何如也、既而朝徹矣、下衆蒼凉雲如錦絮、点綴
墳丘、既而朝徹矣、下衆蒼凉雲如錦絮、起遠近之峰
皆若累堞積蘓焉、七成絶險、曰大縣度、蓋乘危蹈峻
谷于此矣、余病不能起、石室人與杯水、余一嚥、神骨
俱爽、即渡起行、衣袖間、風冷然善也、然後莫我夭閼
者、　鵬背而上、不知青天負我耶、我負青天耶、抑亦
山靈之援我以手也耶、孰謂天之儷之不可階乎、焉

知夫杯水非瓊液哉、余神王甚、前臨吉田、萬松如薺、左右盼焉、則甲城棊峙、鵝湖河口湖澹澹也、湖上雲氣、皆成龍形、使人翩然思騎、翹首唯視一峰、四若及宇、八九成易易耳、蓋是時我骨已換矣、忽凌絶頂、中虛爲谷、谷神不死、玄牝之門、有氣炊累、困僂中頼、實天地元精之所函焉、是爲神池、即上宮、去大鹿四十餘里、外周可六里、内則減三之二、其深百餘仞、俯瞰股栗、我唯涓越于下、是懼、即惴引去、屏氣不息、唯恐鼓動天閽、於是乎攀中臺、跨駒宮、拂劍峰、度雷嶺、謁大宮、朝北極、而下列谷底矣、其稱或以方位、或以形狀、或以靈威、皆有取也、蓋周覽循環自内而外自上而下、自東南而西北、一出一入、一登一降、無境而不窮焉、其間縣崖絶壁、奇石怪巖、如車蓋、如青獅、如駢齒、如雉堞、如霞標者、不可殫狀、有蛻骨、色如白玉、在南壁縣絶處、不知何物鍊師、尸解于此、或云、仙鹿所化、皆未可知、又有銅佛十餘軀、盤坐諸巖石間、此子胖大倍余、何得能來容此、永年不爲風雨刮去邪、豈非具足神通力哉、是日驟雨行南足保浦多湖、皆不可辨、俯聽不聞雷霆、吾聞之、天目雷声、如小兒啼、甚可愛、即知天目亦培蔓耳、谷底層氷積雪、不辨深原、蓋開闢以來、未嘗消釋、嚼之齒牙間有玉氣、有水、曰御盥之泉、出乎石函中、漱之清冷、使人欲羽化、有紫泥黄冠之徒、用打芙蓉真形圖、佩之不逢不若、魑魅罔兩、莫之能近云、是時身蠕於太初、萬靈

紛〻來集、此際蓋多造化之秘、到者方知、余不欲尽泄也、既而及石室、和雪磨墨題名石頭、石室人乞書、余欣然為署曰群玉之圃、石室之有署也、蓋是為始、余聞之、昔帝南赫夜姬端麗、欲内之、不可、曰、妾廣寒宮女也、以微罪謫降、今雲車將至、妾去有日、敢辞、帝不知所為、使甲士執弓矢衛其家、是夜月朗忽失姬所在、姬献不死之藥於帝為別、帝既不得姬、不欲復長生、命侍臣焼棄其藥于此、烟氣上徹天、室永中、其餘烟渡然、雨沙數百里、三日三夜而止、一小峰附贅南腋、俊於形哉、先是延曆中、雲霧晦冥十日、新山成于東脚、蓋神造也、都博士之記曰、負觀之中、致祭有白衣天女、双舞于巔、

吏民咸觀之、尓不審〻〻、余少而彩淺〻、因執笛吹之、忽空寂廓未有應者、迺取笛化作鳥、形曰、陟芙蓉兮挹瓊漿、望美人兮于帝乗、風飄飄兮吹霓裳、目眇〻兮怳以傷、出一裳、时日落虞渕、秋色蒼茫、雲中〻忽、彷彿影降、兮耶飛飛、影從〻未由也已、遂蹈嶺而下、抵第八宋、路左右岐、右走湏走、左走吉田、余乎舍故就彩、出趨于吉田、余幼时少之人、曰下嶺右、以瓦為稿、推移而六、勢如建瓴、今与〻飛也、〻〻就六路右右〻敷秋、左右更擿、跳躍而六、一路砂砾、没足滅跗、杖之喪屩、遯相為夫臣、屩〻砂砾、杖又相靡、〻〻〻〻馳、而莫之能止、杖屬蝕、屩屬蠹、足屬坐繭、杖右未玉、後右尋及、因以

為累騎、因以為陂流、從之者六、乃人如蜜、〻如雉、〻
必爵、顧六〻者之中、六為乃已矣、蓋窮日之力、而
僅能步抵山、坂山、礫者、氏山之向背、故折之回久、從
〻而覆、余与〻人、曰山中諸宮、肉眼不能視、要為砂
礫、非紫色、蔵人百、而滑者、於氏易、脚者、於石之沙岩
而反云、白云蔵矣、余指後旅、如迷襄、埃〻地、〻里
所追及、為〻去、〻中〻玉、蓮香者、二人、曰月
世、玉吉田、二中、作〻乃、乃夢、鶏、太夢、象、愕、鉞、勢、ふ
已、遂〻、家〻碩、者、大木、蓊蔚、乃見、星、夜、縛、矩、以
相、奎、林中、一、堡、反〻、惰、相、安、錯、交、見、如、指、ふ、与
幾百、級、獄、智、相、引、何、縣、而六、命六、命、険、人、覆、如
沐、瀟〻、為、嗚、于六、作、矩、已、滅、冥〻、七八、里、掌、険、秩

阻、歴小宮、迄、内、焉、坂、出、奇、商、埜、而、相、牙、設、矣、蓋、不、交
腱、支、荻、下、上、山、八中、作、里、僅、抵、吉田、始、得、平、地、則
鶏、鳴、矣、主、祝、雁、九、家、主、人、雖、齊、乎、澆、余、以、酒、余、引
満、一、再、舎、爵、則、黎、明、矣、二、十、三、日、午、後、謁、木、華、氏
廟、即、吉、田、六、玄、比、須、之、為、孫、壮、麗、是、日、探、胎、窟、又
明、日、発、雁、九、家、南、並、山、行、草、莽、中、二、十、作、里、豺、狼
所、嗥、絶、無、人、跡、亦、裔、野、也、昏、黒、到、秘、圖、窟、雷、雨、大
作、秉、炬、而、入、濶、可、容、數、百、人、大、石、錯、落、有、水、没、膝、
冷、不、可、言、石、柱、屹、立、宛、若、琢、成、石、乳、垂〻、下、滴、行
二、三、百、武、洞、口、漸、狹、僂、而、入、面、掩、水、故、不、可、究、余
聞之、父、老、曰、徐、福、避、秦、入、海、求、蓬、萊、蓋、留、此、地、不
去、我、焉、知、此、非、其、藏、未、焚、之、書、処、哉、唯、年、代、久、遠、

世莫有能津逮者、悵然久之、遂帰、投宿亭長赤池氏、天正中、神祖之卒次于此、郡内人夜襲之、赤池氏之祖射退之、神祖賞厥功、賜以此地、永〻免其租、有朱篆藏于家、余得親観焉、謹按、維嶽降神、神祖以誕英雄之資、寛仁之度、光輔王室、攪乱及正、黎庶父安、昌平百年方今使吾儕小人千里裹糧、不見畏塗、得以優遊山澤間者、蓋亦莫非神祖之德之所致焉、豈不魏々乎盛大矣哉、詩云、高山仰止、景行行止之謂也、明日辭赤池氏、取道甲府跋渉四百餘里、旬有五日而反、八月初二日也、斯行所歴、奇勝非一、然余既拊髀芙蓉之巔、服日華餐太古雪、則天下之奇盡矣、雖有它勝、豈足道哉、但二窟者、大嶽精氣之所出入、故記中得録焉、

宝暦五年乙亥秋八月　　秋儀撰

文政六年癸未夏四月十八日　　中村直道寫之

菫蒻録巻之廿四終

薫蕕録巻之四終